

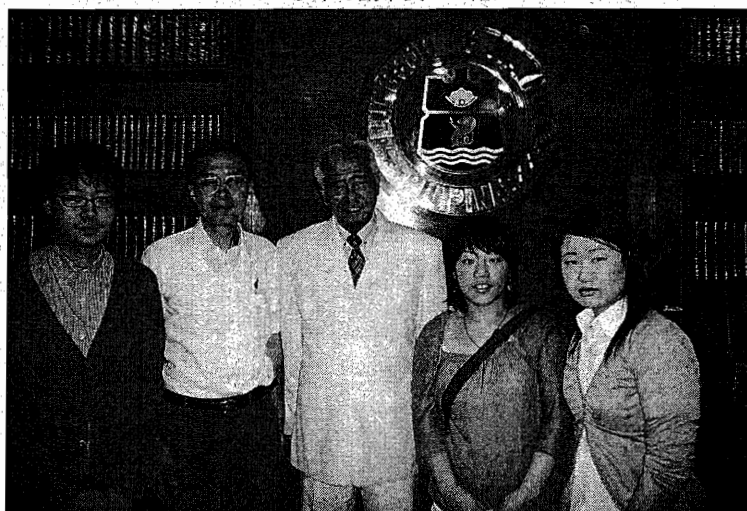
『フィリピン経済調査から見えてきたもの』

国際地域学部国際地域学科2年

山口裕美

私たち坂元ゼミでは、発展途上国に対して経済学的接近を行う、また、その分析方法に習熟することを目的としています。

共同研究の発表やイベントなどを通して、発展途上国の経済について考え、学んでいます。9月18日から24日にかけて、ゼミの一環としてフィリピン・マニラ首都圏で現地調査を行いました。貧困問題や経済開発の現状、そして政策について知るために、インタビューを行った



Gawad Kalingaの支援によってきれいに整備されたコミュニティの様子

あることが理解できました。こういった財政状況では、教育環境を整えることは厳しくなります。教員数が足りないためにカリキュラムを午前午後、夜間の部へと分割しなければなら

た。また、学校へ行けない子供がいることも現実の問題です。フィリピンには、ごみ処理場などでごみを捨てる、それを現金に換えて家計を助けている子供がたくさんいます。そういった子供

貧困や経済格差知る

NGOの活動が印象的

私たちはごみ処理場という劣悪な環境の中にいるために、健康面において、とても高いリスクを背負っています。フィリピン大学の教授によると、これらの子供たちは病院へほとんど行けないのが現状だそうです。マニラに到着した最初の夜、雨の中路上で物乞いをするストリート・チルドレンに遭遇しました。すぐそばにはきびきびやかに輝くショッピング・モールがあり、買い物を楽しんだ人々が雨宿りをしていました。その対照的な情景の意味が、インタビュー調査を通して、より深く理解でき、貧困や経済格差をフィリピン社会のリアルな問題として、突きつけられたような気が

しました。インタビューに加えて、現地NGOや学校などの現場を視察することもできました。訪問した現地NGOの一つに「Gawad Kalinga」世話、保護をすることの意 があります。Gawadの活動はフィリピン全土に及んでおり、私たちは事務所のあるマンダラヨ市と、マニラから南に離れたバタンガスのコミュニティを訪ねました。このNGOは、「ノー・モア・スラム」という標語を掲げて、主として住居建設を通してコミュニティへの支援を行っています。しかし、ただ住居の建設をするだけでなく、一人一人が住民であることの意識づけ、さらには環境や衛生面でのサポートを行い、長期的な支援を目指していることでした。コミュニティ内は、どの家もカラフルにペイントされていて、元がスラムであった土地とは思えないほどでした。どのコミュニティでも、NGOの職員と人々が、お互いに信頼し合い、より良いコミュニティや暮らしをつくるよう活動しているのがとても印象的でした。また、コミュニティの人たちの言葉や笑顔からは、ただ物質的に豊かななる、安定するだけでは成し得ない活動の成果というものを感ずることができました。

今回、実際にフィリピンに行きたくなった人たちに会え、触れあえたことは、とても貴重な経験となりました。インタビューや訪問を通して学んだことや感じたこと、また帰国後のレポート作成を通して得た成果を、自分自身の中で深めたり広げたりしながら、今後の研究につなげていきたいと思えます。

田園の学舎 まなびや
東洋大板倉キャンパス
発
～第3部VI



現地のNGO職員との会食(左端が筆者)